| 糸魚川タイムス | 掲載日 2016 年 12 月 2 日 |
|---|---|
| ワセダ発！ぶつかる社会連携　大学職員による教育プログラム | |

2016年（平成28年）　12月2日

早稲田大の
tsunagaru

# 教育プログラム1冊に

## 糸魚川市での体験掲載

### 糸魚川市ゆかりの伊藤岳さん推進室に

早稲田大の学生が糸魚川市など全国各地で地域に飛び込み、さまざまな体験を行う社会連携教育プログラム「tsunagaru（つながる）」が1冊の本にまとまった。「ワセダ発！ぶつかる社会連携―大学職員による教育プログラム」はプログラムの成立や、そこに込めた思いなどがつづられている。

プログラムは、同大教務部社会連携推進室（現教育連携課）の職員が提案して2014年に始まった。学生が3泊4日で仕事や地域の活動に参加するもので、体験そのものではなく対象となる人に触れ、その生き方から「何かを得ること」を重視している。

その前段階に、大学内で学生同士の交流を深める「fumidasu（踏み出す）」プログラムを行い、両者を合わせて「IPPO（一歩）」プログラムと名付けている。

立ち上げから今年10月まで、同推進室でプログラムを担当した伊藤岳さん（50）は祖父の代まで糸魚川市に暮らしており、夏休みに遊びに来ていたという。同大の校歌を作詞した相馬御風との縁があり、糸魚川市で実施した。渡辺酒造店、小田島建設、上越漁協が受け入れ先となり、同市が全面的に協力した。

伊藤さんは「（準備の）オリエンテーションと現地では、学生の表情が違う。緊張が取れている」と話す。「人に受け入れてもらう体験が学生には必要。人の生き方や価値観に触れて、自分の人生をどうするかという気付きに持っていきたい」とプログラムの目的を解説した。

同書は同大社会連携研究所所長の友成真一教授が執筆した。このプログラムが必要となった背景や企画段階、協力者の選定、成果などが書かれており、糸魚川市での体験や受け入れ先の思いなども書かれている。

伊藤さんは「大学の職員が主な対象だが、学生の気付きや受け入れた人の考えも書かれている。大学生本人や親、高校生などに広く読んでほしい」と話した。

プログラムは今年の夏で終了。伊藤さんは「成果を参考にして、来年度以降も何か学生に対する活動をしたい」と話している。

同書は水曜社刊。四六判並製で税込み1,728円。

プログラム提案者の一人、伊藤さん

昨年のプログラムで上越漁協を訪れた学生たち（昨年8月4日）